

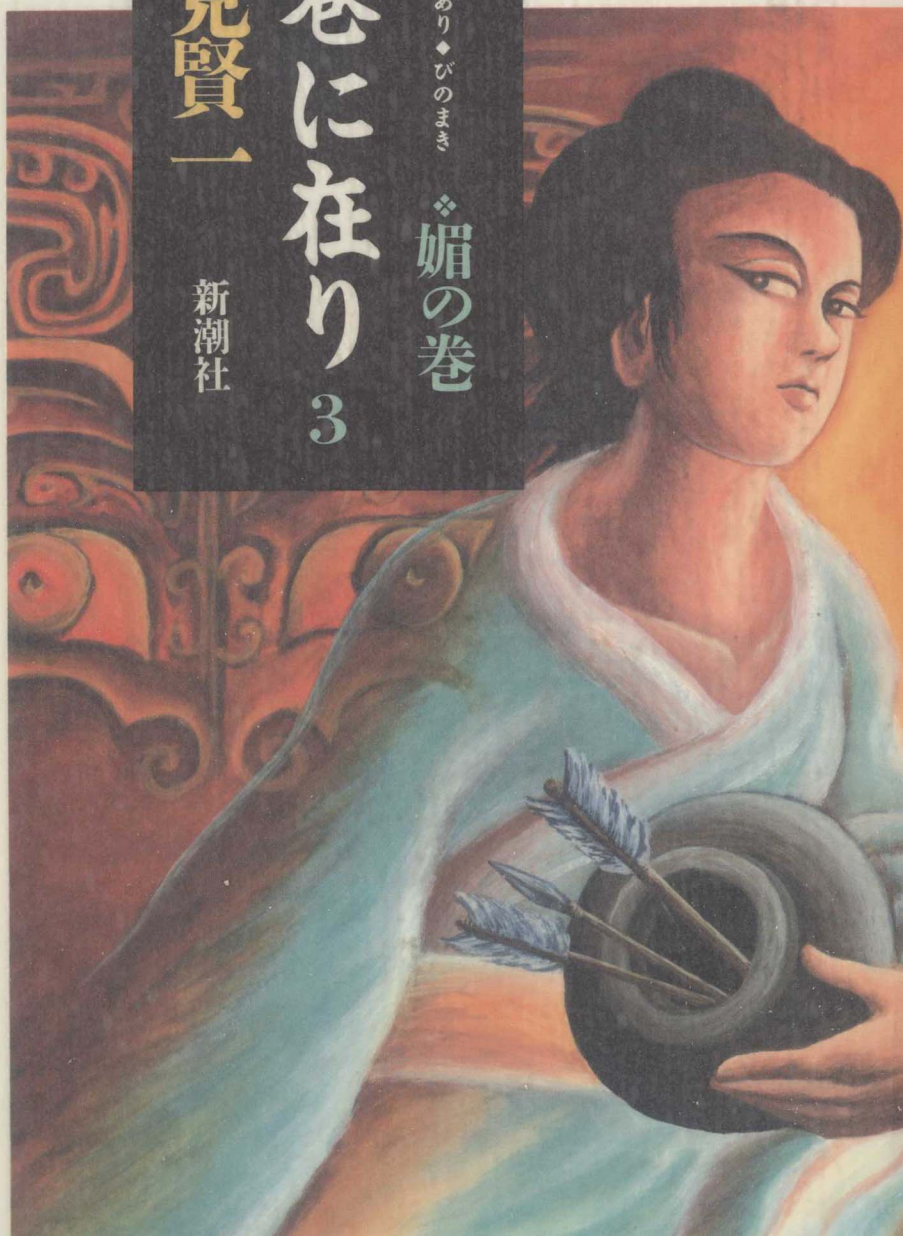
ろうこうにあり◆びのまき

◆媚の巻

陋巷に在り 3

酒見賢一

新潮社



ろうこうにあり◆ひのまき

＊媚の巻

陋巷に在り 3

酒見賢一

新潮社

陋巷ろうこうに在りあ 3 媚めいの巻まき

一九九四年五月三〇日発行

著者 酒見賢一さけみけんいち

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

郵便番号 一六二

電話（営業部）03-3366-5111

（編集部）03-3366-5411

振替 東京四一八〇八

印刷 大日本印刷株式会社

製本 株式会社大進堂

価格はカバーに表示してあります。



© Kenichi Sakemi 1994,
Printed in Japan

（乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。）

ISBN4-10-375106-1 C0093

陋巷に在り

3 媚の巻

目次



土偶^{どぐう}
(二)

126

媚^め
(二)

104

媚^め
(二)

79

儼^{げん}
(二)

35

儼^{おにやう}
(一)

7



土偶（二）

134

公伯寮（二）
こうはくりょう

169

公伯寮（二）

198

夜虎（二）

216

夜虎（二）

231



装画・カット 諸星大二郎

装幀 新潮社装幀室

陋巷ろうこう
に在あり

3
媚び
の
巻

媚 声符は眉。眉は眉飾。媚はその眉飾を施したもので、巫女をいう。「説文」一二下に「説ぶなり」と訓する。「詩、大雅、仮楽」「天子に媚はる」、「卷阿」「庶人に媚はる」は媚愛の意であるが、字の初義は媚疊とよばれる呪術を行なう巫女をいう。……媚とは美しき魔女、媚態・媚辞はすべて魔女的な行為である。

——白川静「字統」より

おにやらい
儼（一）



子路が案内を待たずに駆け込んでくるといふのはいつものことだ。だが、そういう、非礼というよりは慌て振りも最近はなくなくなってきたところである。昔と違って、今は季孫家の宰を務める大夫の身だ。弁えが必要な身であった。それでも孔子に何事かが起これば子路は平気で礼を忘れることができる。

孔子は磐を前に坐していた。だが、撃つでもなく、歌うでもなく、静かである。

「先生！」

子路は荒い呼吸をしている。

「疾を病したのではないのですか」

孔子は何事かと責めるような表情で子路を見た。子路は途端にすぐごと後ずさる。

「疾のうちだ。しばらく君庭から忌まれる」

「ははあ」

とにかく孔子は病気ではないようだ。ほっとした子路は坐りなおした。

「では、例の件ですか」

孔子は頷いた。

少正卯邸探索の翌日、孔子は自ら願い出て蟄居していた。それが病気の為という噂になって

流れたところもあったのだ。孔子の蟄居は自分でしめしを着けるためであるが、重臣たちの判断次第ではこのまま失脚ということも有り得る。子服景伯も孔子にならって家にいるが、こちらは近々に許されることとなろう。何分、孔子の味方は定公くらいのものである。飾りものの定公にはそれほど発言力は期待できない。ただ孟懿子や季桓子は孔子の失脚を望んでいるわけではない。糾問を受ける前に蟄居したのは、孔子のひとつの賭けであった。孔子はこの事件の為に罷免などはないと確信していた。口にこそ出さないものの、

（天が丘に仕事を与えているのだ）

という思いがある。天とは比べものにならないが、定公はまだ孔子の力を必要としているだろうとも思う。

「しかし、先生、少正卯の邸に踏み込むなら踏み込むで、何故、おれに、いや、わたしに言ってくれなかったのですか。そういう仕事こそ由の得意でありますのに」

子路はあからさまに不満の意をあらわした。

（水臭い）

の一言に尽きるのだ。

「わたしもあの少正卯の野郎、おっと、少正どのがどうにもうさん臭い人物と思っていたところだったのです。巫祝どもの件は別としても、叩けば埃の出るやつに違いはない。そういう仕事を先生が手ずからなさることはないのです。わたしに一言言ってくれば」

直情型の子路は歯ぎしりせんばかりである。

「一言言えば、どうした？」

「そりゃあ、昼でも夜でも選ばず踏み込んで証拠を見つけ、徹底的に泥を吐かせましたよ。警吏

も衛兵も不要。この由一人で十分だ」

孔子は怒りをのぞかせた。

「馬鹿者。そんな事だからお前には言えないのだ」

「はっ、今のは言葉の勢いというもの。当然のことですがそんな乱暴なことは決して致しません」

子路はすぐさま恐縮する。

「それにお前は季孫の宰だ。職分をわきまえなさい」

「はあ。しかし先生、それでも水臭うございます」

孔子はしよのない男だというように苦笑した。

「お前は季孫の宰でなければならぬ。知らせていれば必ずお前は首を突っ込んでいただろう。それで季孫を辞すようなことがあつては後々困るではないか」

子路は顔を上げた。

「わたしの処遇は近日中に決まるとは思ふ。もし、司寇しこうを免ぜられるようなことがあらうと、三桓家さんげんを倒す計画は放棄するつもりはない。その時はお前に事を中心になつて動いてもらわねば話になるまい」

子路は、はっとしたように背筋を伸ばすと、

「それがし、無思慮でございました」

と嬉しそうに言った。

孔子はまんまと少正卯の罠わなにかかつてしまった。だがそれを口惜しがっている暇はない。既に公治長こうちちやうから、巫祝消失の真のカラクリも聞いていた。今更、その秘密の出入口などを暴こうとは思わなかった。つまりは叔孫家が少正卯と共謀して孔子を嵌はめたという事になる。おそらく少正

卯の謀にはまだ先があった。それが少正卯不当捜査の失態を揉み消しても構わないという提案だったのだ。うかつにそれに乗っていれば、さらに深い罠に陥ちると孔子は直感することが出来た。だから即座に断った。孔丘仲尼を甘く見てもらつては困る、と言いたいところなのだが、現状は孔子に著しく不利である。

そこまでは分かったが、なお解けない点がある。少正卯の背後にいるのは大がかりに隣家まで提供した叔孫氏かも知れない。叔孫氏は巫祝を雇う資金を出すくらい何でもない富家である。だが、何故、孔子にそんな罠を仕掛けるのが今一つ分からないのである。孔子の失脚が望みならば、そんなおかしな手を使う必要はあるまい。また巫祝団を動かすことが尼丘を刺激することくらは承知のはずだ。さらに少正卯自体が分からない。礼術の達者ということは見せつけられた。少正卯も単に叔孫氏が雇った流れ巫者なのか。それならそれで話が通らないことはない。

孔子は、一見、平々凡々とした印象の叔孫武叔の顔を思い浮かべる。その奥には、機を見るに敏な、逃げのうまい狡猾な表情が隠れていることもすでに知っていた。だが、結局は家と地位を守ることに汲々とする小人としか評することができない。積極的に謀略するような人間とは思えなかった。武叔以外の叔孫氏の有力者の事も考えてみた。陽虎事件でわりを食った叔孫輒などがある。彼らの中にも少正卯のような怪しげな男を使って何事かを企むといった要素は見いだせない。

だが、必ず何かが裏にある。それだけは間違いないことだ。だから孔子は少し見ることにした。同じく三桓家打倒を計ったとはいえ、陽虎の轍を踏むわけにはいかないのである。

「これも機会だ。しばらく身を養うのも悪くはあるまい。知らぬ者には疾を得たことにしておいてさう」

と孔子は子路に言う。

「子孫の殿に申し上げて、先生を并護していただくことくらいは出来ますが」

とそれでも心配顔で子路は言った。孔子は一言、

「不要」

と答えた。季桓子に口添えなどを依頼するのはかえってまずいことである。

「今は、時をおこう。しばらく顔を見ることがなかった弟子たちと過ごそうか」

孔子は途端に温顔となった。子路にはもう言うべきことは無かった。

子路が孔家を辞して、堀ぎわを歩いていると、中から孔子が磬を撃つ音が響いてきた。子路はちよつと首をひねつたが、そのまま歩み去った。

子路とほぼ入れ換わりに、一つの影が入り込んできた。これも案内不要の人間である。

「用心深いおぬしにしては、いかにも杜撰ずせんだったな。やきが回ったのかね」

僇この老人がぶすりと言う。

「果断を責められるのは心外だ。だが、たしかにうまくやられた」

孔子は磬を撃つ手を止めて、穆ぼくに言った。

「やられた、とはあつさりした言い様だな。ふん、隣家への抜け道か。ふたを開けて見ればそうたいしたべてんでもなかったではないか。お前にならば見破れたはずぞ。政事などに足を突っ込んでばかりだから、技倆ぎりやうがにぶるのだ」

「あれを見破るのは容易ではなかった。わたしには何も感じられなかった。多分、おぬしがあの場にいても見えなかったはずだ」

しかし、顔穆はそれを孔子の言い訳としか受け取らなかったようだ。鼻で笑った。

「仲尼、何故、みずから礼を使わない。少正卯を相手に素手でやるつもりなのか」

「だめかね」

「お前が黷^{きた}られるのは一向にかまわんが、顔氏の礼まで舐^なめられるのは面白くない」

「それは太長老の言葉かね」

「わしの存念だ」

「そうだろうな。わたしは礼を知る者だが礼を捨てる者でもある。義^ぎしい祭祀^{さいし}のための礼以外は邪惡^だに墮^おし易い。そのようなものをわたしは求めない」

「敵にもそんなことを期待するのか」

「それは別の話だ」

「だが、お前は公冶長に術を使わせているではないか」

「そうだ。わたしもまだ不徳。理想は遠いと知る」

「なんとも開き直る男だな」

そして顔穆はにたりと笑った。

「それで、何を言いにきた」

穆は素早く周囲を探った。目と耳と鼻と皮膚と、第六感までも自然に動員している。そして口を開いた。

「今はまだ話すことはない。しばらくの間、たまに顔を出すとしよう。仕方があるまい。太長老は言い出したらきかない方なのだ」

「東里の巫祝の出所はもう分かったのだろうか？」

「まあな。斉から来た者だった。中心に脊^{せき}氏儒の者がいるが、他の多くはあふれ者よ」

孔子は斉の儒と聞いて、眉をひそめた。脊氏と言えば斉では名の通った儒の一族である。

「理由は」

穆は首を振った。本当は知っているのかもしれない。

「では、少正卯は」

これにも穆は首を振った。

「仲尼、そうならむものではない。隠しているわけではないぞ。わしと、あと何人かがその為に魯城に出向いてきたのだ」

「そうか」

「仲尼、お前は樂觀しすぎている。政事に足を突っ込み過ぎて、鬼神の声を聞く事を忘れたのであるまいな」

「……」

「ほれ見たことか。十分に気をつけるのだな。事はお前だけの問題ではないのだ。要点が知れるまで三桓家と事を構えるのは待ったほうが得策だと忠告しておくか」

「それとはまた別の話だ。わたしは少正卯など相手にするつもりはない。乱れをただしたい。それだけのことだ」

「それもよからう。わしも今はまだ話すことはないのだからな」

穆は皮肉な笑みを見せると、孔子の前から消え失せた。孔子は再び磬を撃ち始めた。今の穆との会話は無かったことのようにだった。

定公の十一年（前四九九）は魯に事の無い年だった。「左伝」には宋国の叛乱事件の事が述べられている。その内乱の発端は、宋君（景公）が家臣の向魋（しょうたい）を寵愛（ちやうあい）して他を顧みなかったことであるとなっている。孔子関連で注目すべきは向魋という名であろう。向魋は「論語」「史記」には司馬桓魋（かたたい）という名で登場する。向魋は後に、出魯し放浪の途中にある孔子を軍隊を率いて襲撃す

ることになる男である。

それはともかく、定公十一年の冬、孔子は少正卯に謀られたお陰で、唐突に無風状態の中に置かれることになった。そういう時期のこととしたいことを書いてみる。

子貢が孔子に会うことができたのはこの時期である。蟄居は謹慎の態度であるから、大つぱらに門を開いたりはいしない。さりとて喪にあるわけでもないから、弟子を特に拒む必要もないということだ。

顔路は子貢を連れて孔子の邸にやってきた。本当は顔路は子貢を孔子に引き合わせる役を顔回に押しつけるつもりだった。ところが、顔回はここ一兩日体の調子をひどく崩し、一時は中風を病んだような情け無い姿をさらしていたものだ。今はもう起きているが、大事をとって家に置いてきたのである。

(性悪な風邪がはやるもんだ。好風邪とでも呼ぶか。今年は気合いを入れて儼おどろを行いってもらわないといかん)

顔回は原因が子容しようの媚壘びこであることを顔路に話していなかった。

「つまらなそうな顔をしているな。念願がかなったというのに」

小者に案内を乞うと顔路は子貢に話しかけた。

「そんなことはありませんよ」

と子貢は言った。

「熱がさめたのか。会ってがっかりしてもわしは知らんぞ。孔子、孔子とたたえられているが、お前が思っているような面白い男ではないかもしれんしな」

顔路はやや意地悪そうに言った。